

(前号より引き続き)

ボンボウズ日輪様の日を以て一日といふ。月を南(1ウ)無へで一つ突くと一人宿ります利で一日と云ふ。三ツ寄せると三三九十日となる。九がなくなる。三日三夜さに宿してみたる理で云ふ。三ツ身につくほと、よひことあるまいな。四寸の理を以て、ししゆうへしやわせといふ。四と九十日とで、四九三百六十日となる。一年の切かへとなる。百九十三日は七月十三日となる。たなまつりなり。十四日坊づの祭りなり。これでほん坊ずと云ふ。

ひがんの訳(2オ)

ボオズメ二月に七日と、八月に七日とつとめするのハ、面足の命、国常立の命の二人の利ハ、七日を南無阿弥陀仏の七人の神様の葉で、一日一夜で一神の勤なり。八月七日ノ葉は八月八方の神様御揃ひなされたで、七日七夜の勤めハ前の通りなり。コノ理を以テ坊ずは二月と八月とに七日つゝ葉ヲするなり。四月八日花たてる六たいの片方の形ヲ以て立るな。しんこん宗でのまくさまいたと云ふを、農へ種まく数々よく出来るで、農時く三万と云ふなり。」(2ウ)

人間生れて成じんいたし、国狭土ノ命様、人間に生まれなされて、木綿織を教へなされた。其織る理と云ふを世界も出けたことで、木も竹の子がある如くで、古してやわらかひ者でござりましく故二、依て木に穴おあけて、藤をこまかくにわりさいて、穴に通して木葉を織こんで織なされた。木綿の始めは此理で教へなされた。次に月読の命様、人間生れ出しなされたそれに、月日様ノ心入込なされて、木類一切の仕事を教へなされた。人間生れ出しなされた其名を聖(3オ)

太子なり。次に大食天尊の尊、人間に生れなされて、それに月日入込で、刃物一才のことを教へなされた。次に国狭土の命様の子が達磨様。人間に金物一切の事を教へなされた。此年限は六千年なり。また六千たつてから、雲読の尊、人間にうまれなされて、それに月日心入込で、文字一切を教へなされた。月日様、人間悪き強き故に、仏法と云ふ者をこしらへてなされた。こしらへるとき惶恨の尊ハ仏法にて八日如来ト云ふ。此神様人間に出しなされた名を円光大師ト云ふ。国常立の(3ウ)

尊、善導大師僧にあらわれて、ゆめのつげに五重惣傳をおしゑしに、円光大師に授けなされた。人間を授た神の証拠に、をびや一条あらはれてある。」

以下、24丁まで「こぶき話十六年本」が記されているが、それは省略する。

ここであげた「甘露台ノユワレ」「ひがんの訳」を読んでもいくとき、仏教の教えを考慮しながら天理教の教理が説明されている。これは、考えてみれば当然のことであろう。いままでにない教えなのであるから、人々に理解を求めるとなると、在来の風習、思想なり、宗教、とくに仏教との対比が語られることになる。

そして、この文書が記されたのが明治23年4月のことである。当時、天理教はすさまじい勢いで教線が伸びている。しば

しば「燎原に火を放つごとく」と表現されたほどである。このことは、他面において仏教勢力が弱まるということであり、檀家が天理教に改宗することになると、寺院の経営問題を引き起こすことになっていく。そこに、仏教徒との軋轢が生じることになる。

この文書を記した吉岡辰蔵氏は、明治22年、京都で話を聞いて入信した、と伝えられるが、おそらく辰蔵氏は、こうした仏教徒との争いを肌で感じていたであろう。

『河原町大教会史』第1巻(201～216頁)によれば、こうした仏教徒との事件が、この頃には頻発していたと記述されている。すなわち、「布教が熱心に行われ、お道が広がれば広がるほど、世間の目は厳しくなり、とりわけ在来の宗教の本教に対する攻撃ははげしくなった」、「京都でも、明治23年ころから数年間、この種の事件が頻発している」と。

ある講社での説教日でのこと。

見るも筋骨逞しい僧侶が座り込んで、「質問することがある。早く説教を始めろ」と怒鳴る者、立ち上がっては「おまえたちは、こんなものに騙されてはいかん」と、集まっている信者や野次馬連中に演説する者、これに和す声、反対する声、実に喧嘩囂々であった。すると深谷源次郎会長はにっこり笑い、役員が押さえる袂を払って、演台の前に座り、「お寺はんは偉い人どっせ」と。意外な言葉にびっくりして、一瞬場内が静まりかえった。源次郎は「お寺はんほど偉い人は、まあ、おへんやろ」「私たちの御先祖様をお祀りしてくださるのも、ここにおいでのお寺はんや」と僧侶を礼賛し、「死んでからでない、生きている人間に極楽の暮らしをさしてやりたいと、今度は天の神様直々に現れて開かれたのが、この教えや、けっこうどっせ」と、それから話を始めた。僧侶たちも、神妙に静聴していたという。

こうした仏教徒との衝突がさらに拡大する。というのは、天理教の信者の中には、仏教徒の攻撃に対して、「仏教こぼち」の話をしたり、中には、仏像を縄で括りつけ、打ちならしたこともあったことが、こうした軋轢をさらに過激にしていくことになったのである。

明治23年11月には「上桂事件」が起こっている。これは僧侶との衝突として一番大きなものであった。明治23年11月21日には「京都にて僧侶等集まり、天理教攻撃するとかにて、対抗上河原町分教会も説教するに付、本部より一二名出張り度儀申出により伺」という「おさしづ」を願っている。僧侶側は最初から喧嘩支度で総勢63人、その後に村の青年約400人が続いた。警察署から署長を始め7人、お道の人たちも300人を超えたといわれる。結果は演説会は中止となった。

それ以前、滋賀県の講元が「身の内のお話」や「元はじまりのお話」を説いたことが、本部に伝えられ、その事実調査を分教会に命じられたこともあった。そうした中での、この文書の成立である。

先に触れたように、これには、元はじまりの話も記されており、また、「おふでさき」のお歌が、その後に書かれている。さらに、「おさしづ」のお言葉も記載されているのである。